

—茨城県土浦市—

SHIN DEN I SEKI

神田遺跡

送電線路新設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999. 3

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川などの水資源に恵まれ、太古から人が住むのに適したところがありました。そのため市内には貝塚や古墳、集落跡などたくさんの遺跡が存在しています。遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなることはもちろんのこと、今を生きる私たちが豊かな生活を送ることが出来る先人の業績でもあります。このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私たちの使命であり、郷土の発展のためにも重要なことと思われます。今回の調査は、東京電力株式会社の送電線路新設工事に伴い、神田遺跡の発掘調査による記録保存を目的として行われたものであります。

この調査の成果が歴史の解明に役立てて頂ければ幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行にあたり、東京電力株式会社をはじめ、関係者の皆様のご協力とご支援に対して心から厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

土浦市教育委員会
教育長 尾見彰一

例　　言

1. 本書は茨城県土浦市大字小山崎128に所在する神田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査区の中心ポイントの国家座標値はX軸15,040、Y軸31,781である。
3. 発掘調査は東京電力株式会社の送電線路新設工事に伴い、土浦市遺跡調査会が委託を受け実施した。
4. 発掘調査期間は1998年（平成10年）12月8日から同年12月19日である。その後整理作業を行い3月1日に終了した。
5. 調査、本書執筆は黒澤春彦が担当し、中村和弘が補佐した。
6. 出土遺物、図面、写真等は上高津貝塚ふるさと歴史の広場にて保管している。
7. 遺構図版に使用した記号は「K」が搅乱、「SK」が土坑である。
8. 土層や遺物観察における色調の同定は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）を使用した。
9. 調査から報告書刊行にあたり、下記の方々や機関からご教示、ご協力を得た。記して感謝いたします。

（敬称略） 東京電力株式会社茨城支店 株式会社弘電社 小川和博 福田礼子 山崎誠

目　　次

序　例言　目次　押図目次

第1章　はじめに.....	1
第2章　環境.....	2
第3章　遺構と遺物.....	6
第4章　結語.....	8
写真図版.....	10
報告書抄録.....	13
土浦市遺跡調査会組織　調査者名簿.....	13

挿図目次

第1図　開発エリア位置図.....	1
第2図　周辺の遺跡図.....	3
第3図　遺跡周辺地形図.....	4
第4図　調査区全体図.....	5
第5図　第1号土坑・第2号土坑.....	7
第6図　出土遺物.....	9

第1章 はじめに

1998年（平成10年）8月24日、東京電力株式会社茨城支店より、土浦市教育委員会に送電線路新設工事に伴う埋蔵文化財の有無及び取扱いの照会が提出された。開発箇所は7か所で面積は各100cm²である。そのうち2か所（第1図6・7）についてはすでに調査済であった。市教委では5か所について現地踏査を行い、2か所（第1図3・4）で遺物の散布を確認した。新発見の遺跡であるため、字名から「神田遺跡」と命名し、10月4日付けて57条の6を文化庁に提出した。3か所については山林であるため不明であった。市教委では、埋蔵文化財の有無や状況を確認するには試掘調査が必要との旨を事業者に伝えた。試掘調査は10月14日と15日に実施し、状況は下記の通りである。

第1区 台地上に位置し現状は山林である。4か所（16m²）調査した。確認面（ローム）までの深さは40～50cmである。縄文土器片が1点出土した。

第2区 斜面の裾部に位置し現状は山林である。2か所（8m²）調査した。黒色土までの深さは50～100cm、粘土層までの深さは110cmである。遺構遺物は発見できなかった。

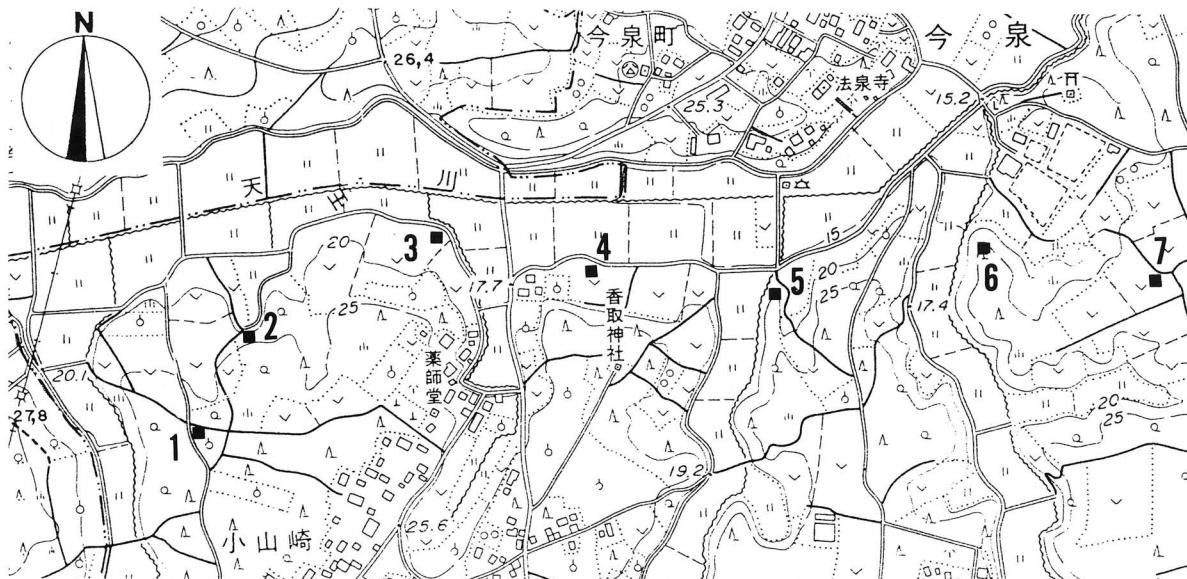
第3区 下位段丘上に位置し、現状は畑である。踏査時に遺物の散布が見られ、神田遺跡とした地点である。5か所（18m²）調査し、北側で炭化物や焼土が混入している個所が発見された。

第4区 第3区とほぼ同じ立地である。5か所（20m²）調査したが遺構遺物は発見出来なかった。

第5区 細い尾根状の台地の先端部で現状は山林である。2か所（10m²）調査した。確認面（ローム）までの深さは30cmである。土器片が1点出土した。

その後、事業者と市教委との間で試掘調査の結果をもとに協議を重ねた。計画の変更は不可能であるということから、埋蔵文化財が確認された第3区について記録保存による発掘調査を行うことで合意した。

発掘調査は同年12月8日から実施した。表土が30cm前後と浅いことや調査面積が狭いことから、人力で表土除去を行なった。除去後、北側半分から落ち込みが確認されたので、十文字にベルトを設定し掘り下げた。テラス状の遺構を調査した後、北側に堆積していた黒色土を除去した。除去後に確認された土坑を調査し、コンタ図等を作成した。遺構の調査は12月17日に終了し、その後埋め戻しを12月19日まで行った。



第1図 開発エリア位置図 (1/10,000)

第2章 環境

第1節 地理的環境

土浦市は茨城県の南部に位置し、東に霞ヶ浦の土浦入りを臨む。市の人口は約134,000人、面積は約92km²を測る。市内の地形は中央に桜川流域の沖積低地、北は新治台地、南は稲敷台地に分かれている。台地の標高は20~30mである。

神田遺跡は市の北西に位置し、新治村との境に近い。周辺の地形は、筑波山から東に延びる山麓に位置し、東西を天の川が流れている。この川は新治村小野に水源を持ち、石岡市で霞ヶ浦に注ぐ恋瀬川と合流している。遺跡は天の川の支流である天王川（谷田川）の右岸、標高18m前後の下位段丘上に位置する。水田との比高差は約1~1.5mで、天王川に向かって緩やかに傾斜している。

第2節 歴史的環境

神田遺跡が所在する天の川流域は多くの遺跡が確認されている。

旧石器時代は西原遺跡（36）で尖頭器などが多数発見されている。縄文時代では草創期の表裏縄文が出土した原田北遺跡（38）などがある。

弥生時代になると遺跡は増加する。上稻吉式土器の標識となっている上稻吉西原遺跡（17）、県内有数の大集落が発見された原田北遺跡、西原遺跡、原田西遺跡（39）、原出口遺跡（37）－4遺跡を総称して原田遺跡群とする、根鹿北遺跡（20）などがある。原田遺跡群出土の土器は在地系の土器に南関東や北関東の土器が融合し複雑な様相を呈している。土器の他に住居跡から鉄剣や、鉄刀が出土した。住居内から鉄刀が発見されることは全国的に見ても稀で注目される資料である。また、穂積具と思われる石製品や粉痕の付いた土器が発見され、これらは稻作を行っていたことを裏付けている。

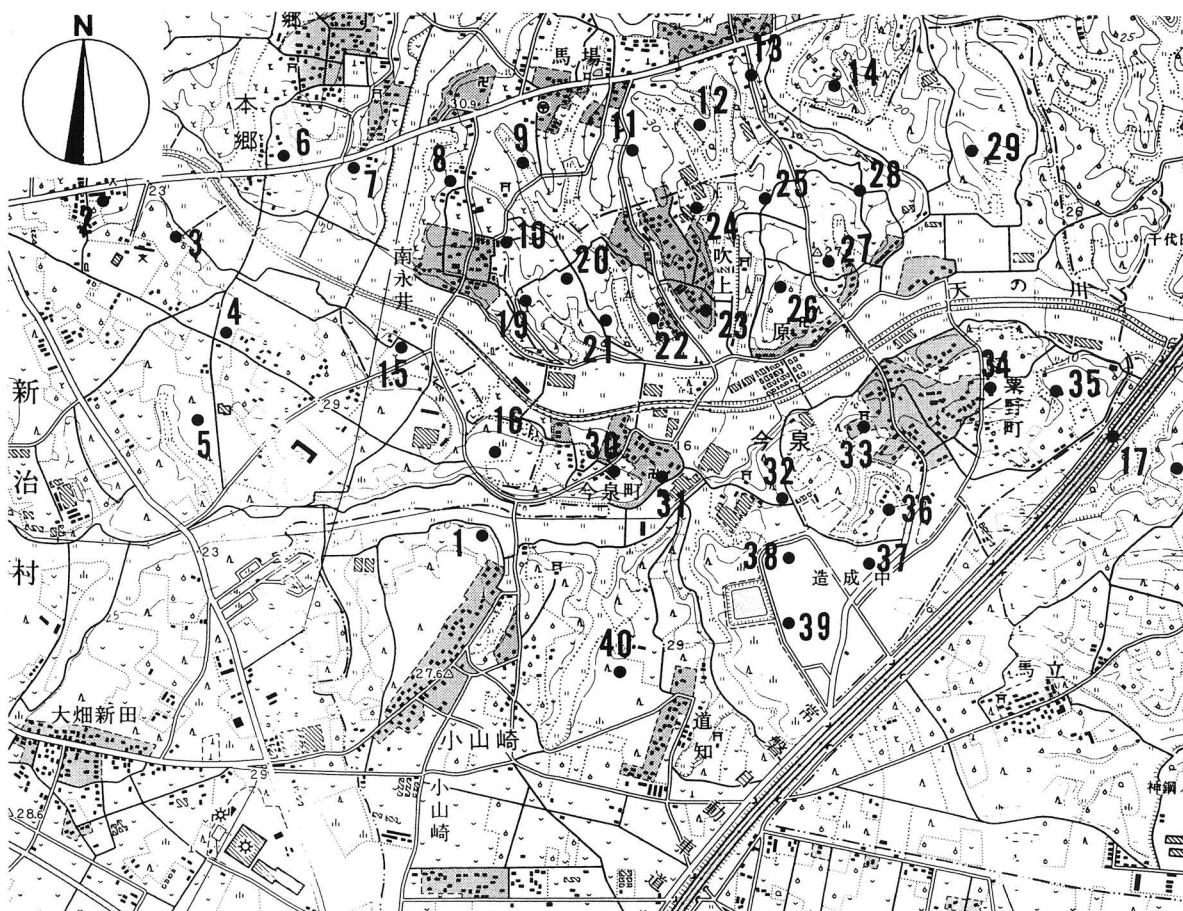
古墳時代の遺跡は方形周溝墓が発見された原出口遺跡や、中期の集落が発見された原田北遺跡がある。古墳も多く、愛宕山古墳を中心とする愛宕山古墳群（32）や堂原古墳群（29）などがある。愛宕山古墳は全長55mの前方後円墳で、6世紀築造と思われる。原出口遺跡からは円筒埴輪を持つ前方後円墳が調査された。根鹿北遺跡からは終末期の方墳が発見されている。また、根鹿北遺跡付近からはかつて石枕が出土した。

古墳時代終末から平安時代にかけてこの一帯は、須恵器の生産地であった。新治村から千代田町にかけていくつかの窯が発見されている。栗山窯跡（19）は1996年に発見され、調査が行われた。7世紀後半の操業で、この周辺では最も古い窯に位置付けられている。根鹿北遺跡付近の谷津からは試掘時に水田跡が発見されている。時期については平安時代以前ということで、古墳時代の可能性も考えられる。

奈良時代、平安時代は茨城郡と筑波郡の境であった。主な遺跡としては根鹿北遺跡がある。ここからは奈良時代の粘土採掘坑や平安時代の集落が発見された。特執すべき遺構として仏堂と思われる掘立柱建物跡がある。建物跡周辺からは瓦塔や瓦堂、灯明皿が出土した。

中世の遺跡としては神田遺跡から500m北東に今泉城跡（30）が位置している。この城は小田氏に仕えた今泉氏によって、16世紀の中ごろに築城された城と伝えられている。

以上のように天の川流域は当地方の古代を解明する上で極めて重要な遺跡が数多く存在している。



第2図 周辺の遺跡図 (常陸藤沢1/25,000)(国土地理院発行 1/25,000に加筆)

周辺遺跡一覧表

図中番号	遺跡名	県遺跡番号	時代							図中番号	遺跡名	県遺跡番号	時代							
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世以降				旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世以降	
1	神田遺跡			○	○	○		○	○	21	根鹿西遺跡	5327		○	○	○				
2	本郷上人塚遺跡	5819		○	○	○				22	吹上片蓋古墳群	4000			○					
3	本郷町田向遺跡	5820		○	○	○				23	吹上坪遺跡	5324		○	○					
4	本郷原山古墳群	2055			○					24	吹上坪古墳群	5322					○			
5	本郷原山・五反田遺跡	5831		○	○	○				25	細内遺跡	5320		○						
6	本郷三合塚古墳群	2050			○					26	塙台遺跡	5321		○						
7	本郷南前・五量遺跡	5787		○	○					27	登戸遺跡	5319		○						
8	永井談所前遺跡	5829		○	○					28	大門遺跡	5318		○						
9	永井中妻遺跡	5828		○	○	○				29	堂原古墳群	4001		○						
10	永井鹿島神社前遺跡	5784			○	○				30	今泉城跡	3995					○			
11	永井三島後遺跡	5832		○	○					31	今泉古墳	5325		○						
12	永井笊田西遺跡	5833			○	○				32	愛宕山古墳群	5317		○						
13	永井十三塚遺跡	5826			○	○				33	八幡神社古墳	5323		○						
14	永井泉前遺跡	5825		○	○	○				34	下坪古墳			○						
15	本郷下川遺跡	5836			○	○				35	下田原遺跡	5328			○					
16	永井内田遺跡	5835		○	○	○				36	西原遺跡	5329	○	○						
17	上稲吉西原遺跡				○					37	原出口遺跡		○	○	○					
18	西田古墳群	2033			○					38	原田北遺跡			○	○					
19	栗山窯跡					○				39	原田西遺跡			○	○					
20	根鹿北遺跡	5326		○	○	○				40	裏山遺跡	5316	○							

参考文献

倉本富美男「上稻吉西原A・B・C」他『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1980.3

(財)茨城県教育財団

土浦市史編さん委員会『図説 土浦の歴史』 1991.3 土浦市教育委員会

茂木雅博 他「土浦市における古墳の測量」『博古研究』創刊号 1991.4 博古研究会

緑川正實 海老澤稔「原田北遺跡Ⅰ 原田西遺跡」『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』

1993.3 (財)茨城県教育財団

江幡良夫「原田北遺跡Ⅱ 西原遺跡」『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』1994.3

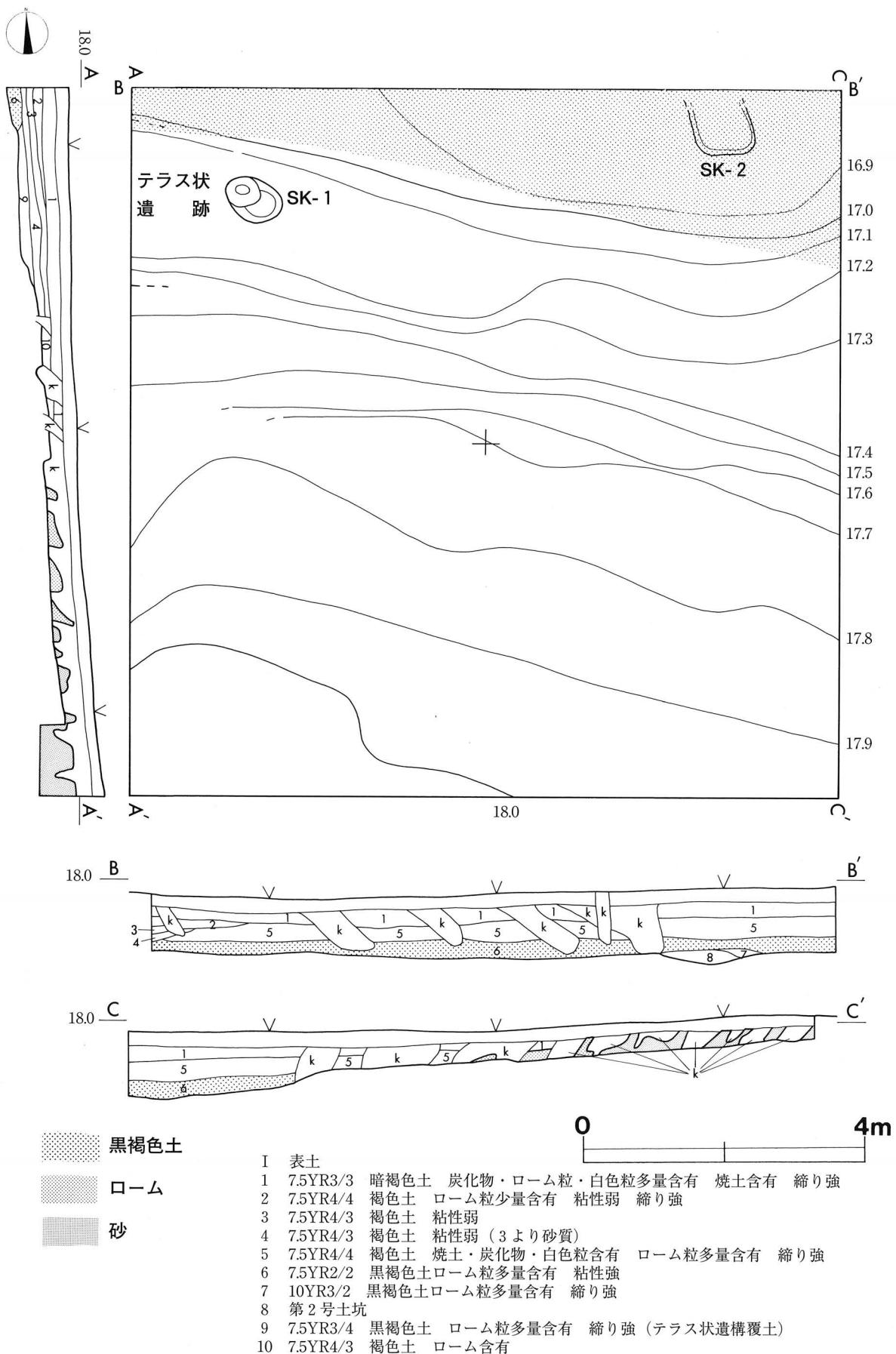
(財)茨城県教育財団

江幡良夫「原出口遺跡」『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』1995.3 (財)茨城県教育財団

関口満・日高慎・吉沢悟『根鹿北遺跡 栗山窯跡』1997.3 土浦市教育委員会



第3図 遺跡周辺地形図 (1/2,500)



第4図 調査区全体図

第3章 遺構と遺物

調査区は、下位段丘の縁辺部に位置し、北を流れる天王川に向かって緩やかに傾斜している。標高は南が18.3m、北が17.8mで、北側と水田面との比高差は約1mを測る。調査以前は長期にわたり畑として利用されており、トレンチャーに拠る擾乱が激しい。表土（耕作土）は20~30cmで、その下層に砂や、粘土質のローム層や砂が堆積している。北側にはローム上に黒色土（第4図8層）が最大25cm堆積している。この黒褐色土は、ロームを含み、縄文土器、弥生土器や古墳時代後期の土師器を包含している。それ以降の遺物が見られないことから、古墳時代後期に形成されたと思われる。

調査区内の表土を除去したところ、北半分から焼土、炭化物、ローム粒、白色粒を多量に含む暗褐色土（第4図1層）が見られた。その下層には、焼土、炭化物、ローム粒、白色粒を含む褐色土が堆積している（第4図5層）。西側では、含有物が少なく砂質で粘性の弱い褐色土が堆積している（第4図2~4層）。これらの土層は自然に堆積したものと思われる。ローム層は北に向かって傾斜しているが、調査区の中央部あたりから急に落ち込んでいる。

調査の結果、テラス状の遺構と、土坑2基が発見された。遺物は、縄文土器や弥生土器、土師器、中世の内耳土器や近世以降の陶磁器などが出土したが小片が多い。

第1節 遺構

テラス状遺構（第4図）

調査区の北西に位置する。自然地形と思われたが、床であるローム面が平坦なことや黒褐色土を掘り込んでいることなどから遺構と判断した。

平面形や全体の規模については、明確なプランを把握することができなかつたので不明である。西壁の土層断面をみると幅2.3m、深さは確認面から0.25mであることが確認できる。中央部に南北に設けた土層観察ベルトには当遺構の痕跡が見られないことから、調査区内は西半分で収まる規模である。

覆土はローム粒を少量含む暗褐色土で、上層に堆積している土に比べ、粘性は強い。

遺物は本遺構に伴うと断定できるものはない。

本遺構の性格については、全体が把握出来ないことや、伴う遺物がないことから不明である。形状からテラス状遺構としたが、溝の可能性も考えられる。時期については、黒褐色土を掘り込んでいることや覆土の状況から古墳時代以降であるが、上層から中世の内耳土器の破片が比較的多く出土していることから中世の可能性もある。

第1号土坑（第5図）

調査区北西に位置する。テラス状遺構の底面で確認された。確認面の標高は15.35mである。

平面は不正楕円形を呈し、規模は0.85×0.6m、深さ0.25mを測る。

覆土はロームを多量に含む暗褐色土である。

遺物は土師器の細片が2点出土した。

時期、性格は不明である。

第2号土坑（第6図）

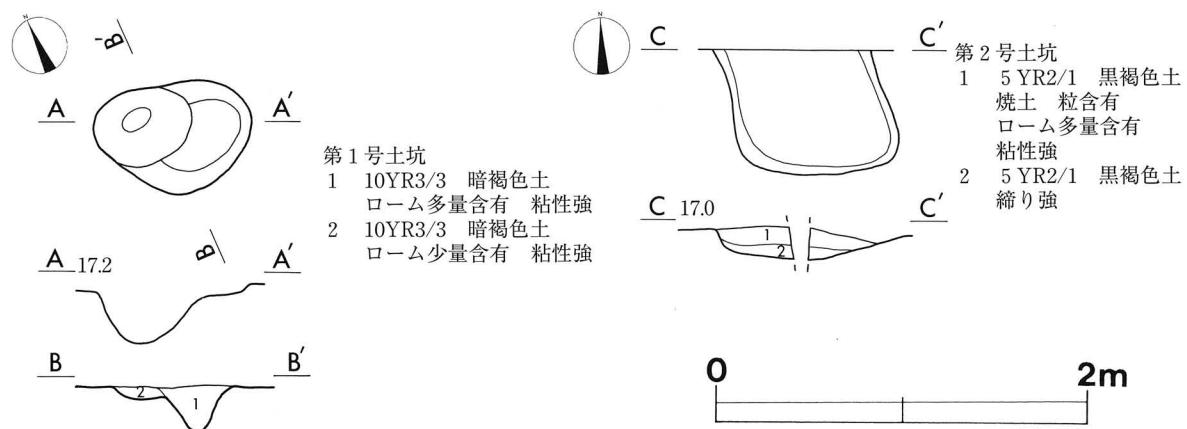
調査区北東に位置し、北側は一部調査区外となっている。ローム上に堆積している黒褐色土を除去した後、確認された。確認面の標高は16.95mである。

平面は不正長方形を呈し、規模は東西0.9m、調査区内の南北0.7m、深さ0.15mを測る。

覆土は焼土やローム粒を含む黒褐色土である。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器の細片が出土した。

時期については黒褐色土が堆積する以前のものであることから、古墳時代後期より古い時代と思われる。



第5図 第1号坑・第2号坑



作業風景（表土除去）

第2節 遺物

遺構の時期を決定することが可能な遺物はないが、調査区から各時代にわたり出土している。しかしほとんどが小片であるため図化した遺物は少ない。

1～8は縄文土器である。1は深鉢の口縁部で竹管状の工具による刺突紋を充填させている。口唇部はやや肥大している。頸部は屈曲すると思われる。胎土は白色の白色や半透明の小石を多く含み、色調はにぶい黄橙（10YR6/4）である。時期については前期末から中期初頭、あるいは早期後葉が考えられるが類例がないため決め手に欠ける。2～4は前期後半、5・6は中期初頭、7・8は中期と思われる。

9は弥生土器である。調査区北東角、黒色土の下層から出土した。3本歯による櫛描波状文が施されている。胎土は透明の小石を多量に含み、色調はにぶい橙（7.5YR6/4）である。

10～13は土師器の甕で、11は北壁際の黒褐色土から出土した。胎土はすべて透明の小石を多量に含み、色調はにぶい黄橙を呈する。時期は古墳時代後期と思われる。14は試掘調査で出土したコシキの把手である。

15は須恵器の甕である。外面の叩きのあとヨコ撫でを施している。内面は、同心円状の当て具でおさえている。胎土は白色粒を含み緻密で、色調は灰色（5Y6/1）である。胎土などから新治窯跡産ではなく、搬入品と思われる。

16～21は中世の内耳土器の口縁部である。16はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、雲母や白色粒を含んでいる。17はにぶい黄橙（10YR6/3）を呈し、雲母を多量に含有する。18はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、白色の小石を多量に含む。外面に吸炭がみられる。19はにぶい橙（7.5YR6/4）で雲母や小石を含む。外面は吸炭。20はにぶい黄橙（10YR6/4）を呈し、胎土は緻密である。21はにぶい橙（5YR6/4）で小石を含む。外面に吸炭がみられる。

第4章 結語

今回調査した遺跡は天の川支流の下位段丘上に広がっている。近年、台地以外にも、斜面や下位段丘上、微高地、低地などから遺跡が発見されるようになった。市内での例を挙げて見ると、斜面では小岩田地内の東出遺跡や中居遺跡（註1）から集落、今泉町の栗山窯跡（註2）は古墳時代終末の須恵器窯、下位段丘上では常名町の八幡下遺跡（註3）で集落、微高地では宍塙の般若寺・竜王山古墳（註4）から中世の寺院跡や古墳が、低地では今泉町の根鹿北遺跡（註2）から水田跡が発見されている。栗山窯跡は急な斜面にあり、踏査では見落とす立地である。しかしこの一帯が須恵器の生産地であったことを考えれば、今後注意を要したい。

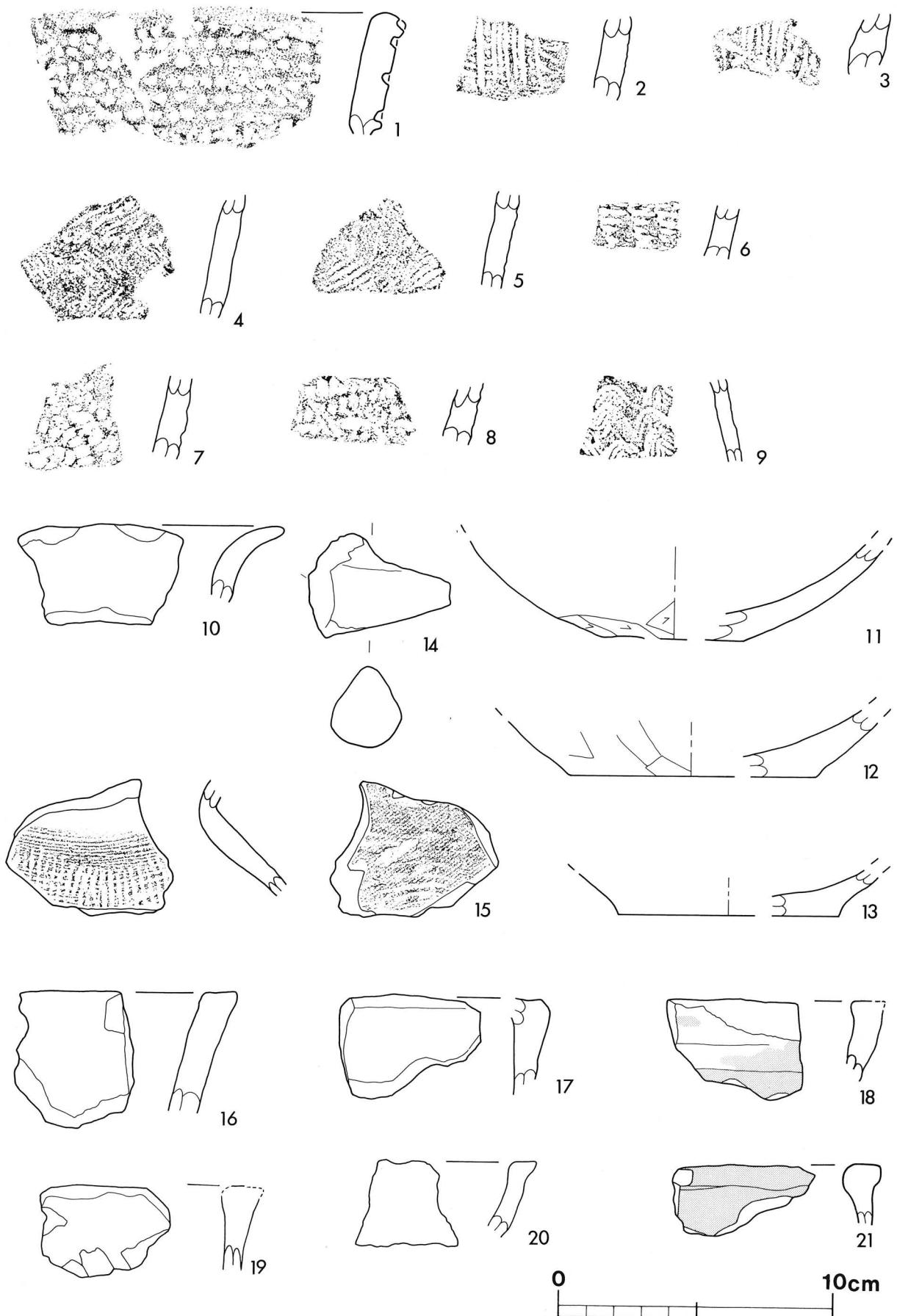
調査した範囲は100m²と狭いため、遺跡の性格を把握するのは困難である。しかし、縄文から中世の遺物が出土したことから、周辺にこれらの時代の遺構が存在していたことは明らかである。また、天王川を隔てた台地には中世末期の今泉城があることから、出土した中世の遺物は何らかの関連が考えられよう。

註1) 1998年に調査が行われ、現在整理中である。

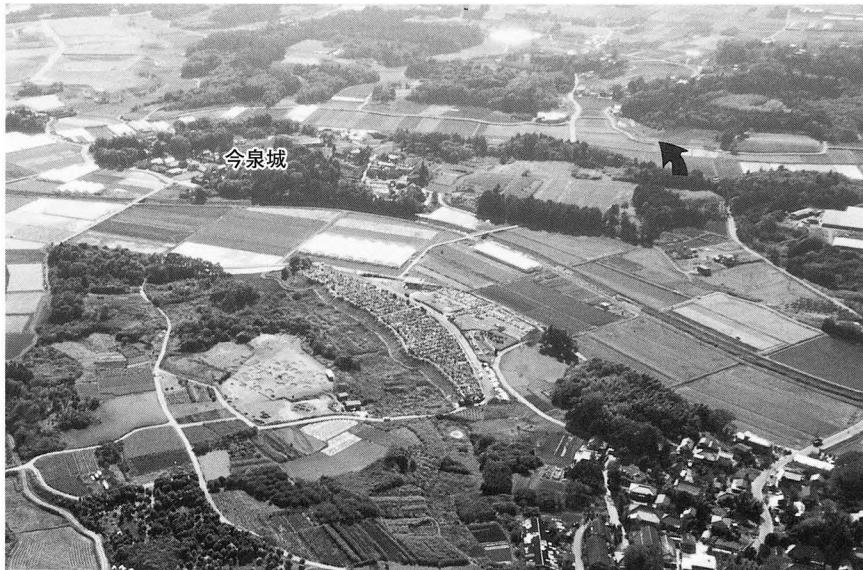
註2) 第2章参照

註3) 黒澤春彦『八幡下遺跡』1991.7 土浦市教育委員会

註4) 塩谷修 他『般若寺遺跡（西屋敷地内）・竜王山古墳・般若寺遺跡（宍塙小学校地内）』1987.3 土浦市教育委員会



第6図 出土遺物

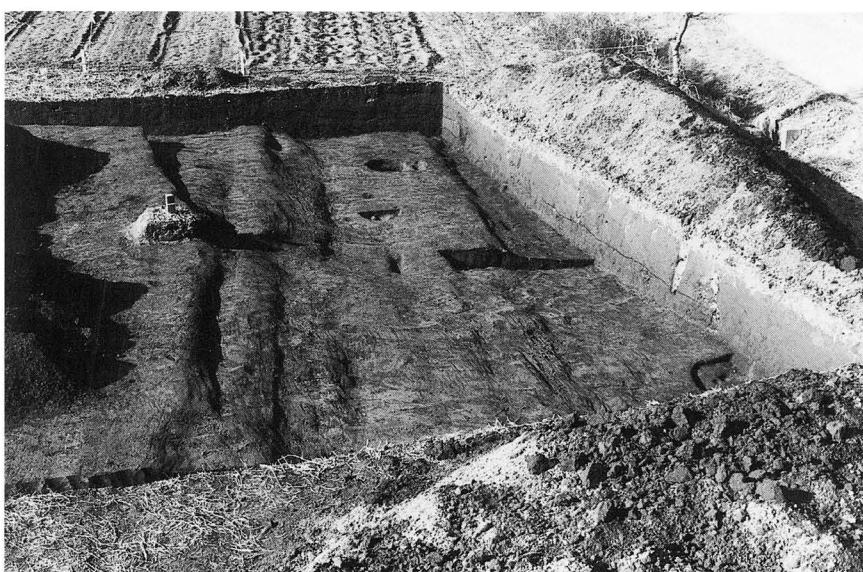


遺跡周辺空撮（北から）

手前は根鹿北遺跡



調査前全景（南から）



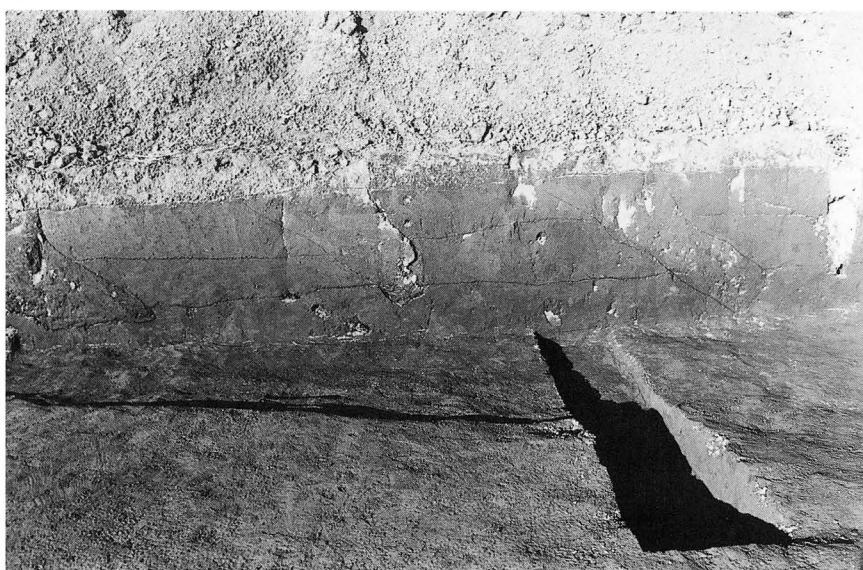
調査終了全景（東から）



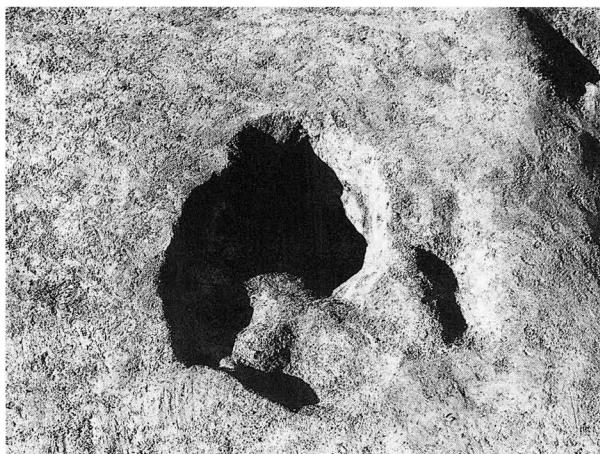
テラス状遺構（東から）



西壁土層断面（北側）



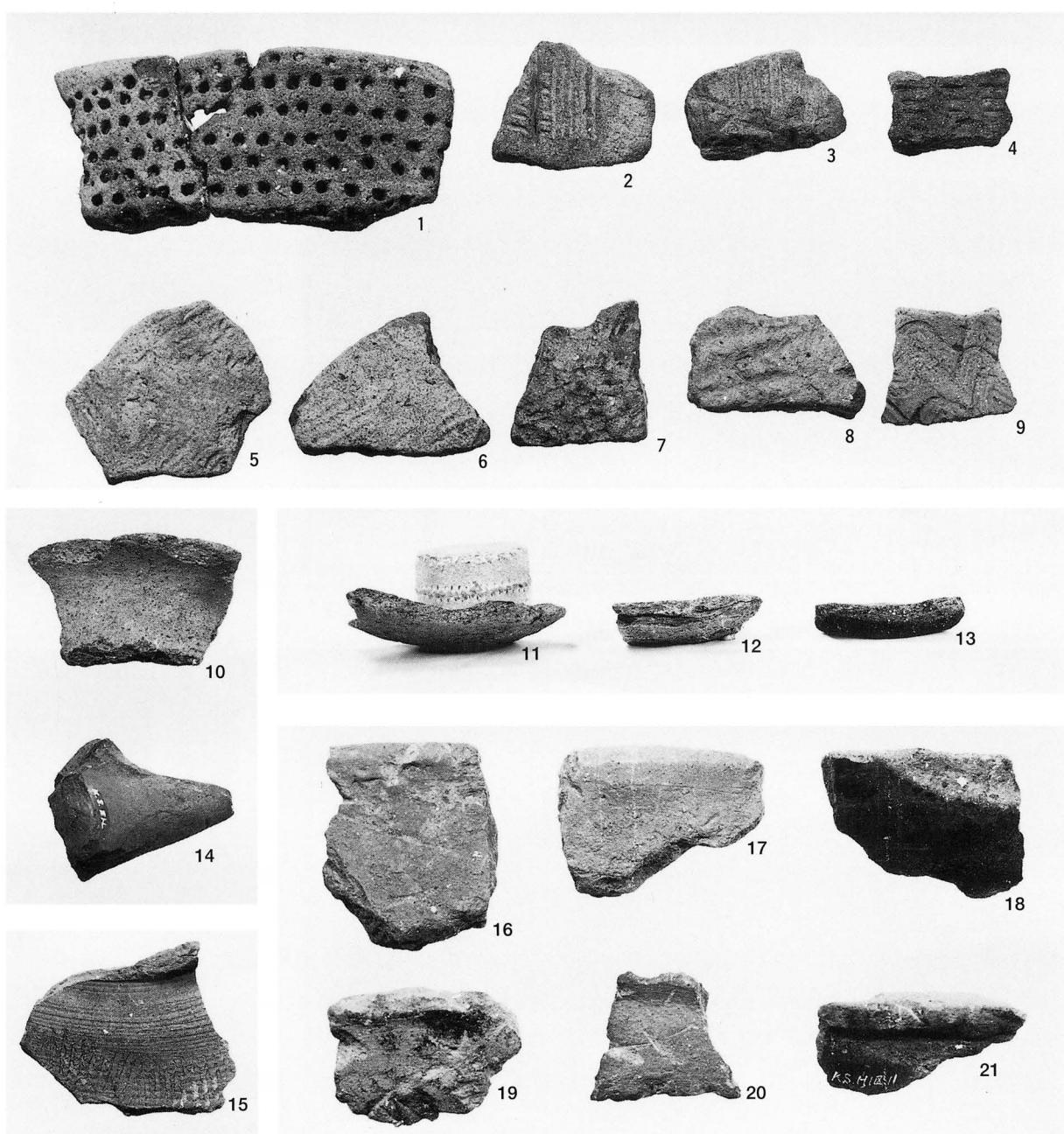
北壁土層断面（中央）



第1号土坑



第2号土坑



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しんでん いせき						
書名	神田遺跡						
副書名	送電線路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
編・著者名	黒澤春彦						
編集機関	土浦市遺跡調査会						
発行機関	土浦市教育委員会	所在地	〒300-0812 茨城県土浦市下高津 2-7-3 6				
問い合わせ	上高津貝塚ふるさと歴史の広場	所在地	〒300-0811 茨城県土浦市上高津 1843				
発行年月日	1999年3月1日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
しんでん いせき 神田 遺跡	いばらきけんつちうらし 茨城県土浦市 おおあざ こやまざき 大字 小山崎 あざ しんでん 字 神田128	08-208	C-80	36° 8' 6"	140° 11' 10"	1998 1208～ 1998 1219	100m ² 送電線路新設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
神田 遺跡		縄文～中世	テラス状遺構 土坑	縄文土器・ 弥生土器・土師器 陶磁器・内耳土器			

土浦市遺跡調査会組織（平成10年度）

会長 須田直之（土浦市文化財保護審議会長）

副会長 尾見彰一（土浦市教育委員会教育長）

理事 大塚博（同市文化財保護審議会委員） 五頭英明（同市企画調整課長） 古渡善平（同市区画整理課長）

萩野房男（同市建築指導課長） 石神進一（同市都市計画課長） 岡田和則（同市耕地課長）

内海崎保雄（同市土木課長） 岩沢茂（同市教育委員会文化課長） 監事 中川茂男（同市教育委員会次長）

小野政夫（同市監査事務局長） 幹事 来栖稔（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長） 萩島優（同市文化課長補佐） 小貫俊男（同） 塩谷修（同市立博物館係長） 石川功（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹） 黒澤春彦（同） 中澤達也（土浦市立博物館主幹） 関口満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事） 比毛君男（同）

宮本礼子（土浦市教育委員会文化課主事）

調査者名簿

調査担当 黒澤春彦（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）

調査員 中村和弘（実務研修生）

発掘作業員 赤根茂 飯村綾子 大久保敦子 大坪美知子 田上敏子 中野富美子

整理作業員 新井栄子 大坪美知子 小松崎広子 川田光子 長嶺道子 浜田久美子

事務局 上高津貝塚ふるさと歴史の広場

神田遺跡

送電線路新設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 1999年3月1日

編集 土浦市遺跡調査会

発行 土浦市教育委員会

印刷 株式会社 あけぼの印刷社
